

高尾山 歴史の散歩道

明治大学博物館 外山 徹

炊谷―中興開山の縁起

客殿の脇を抜けて福徳弁財天の前から先へ延びる道筋に入ると、現在は人の行き来もまばらな森閑とした空間が広がるが、実はその一帯こそ、高尾山の中興開山にまつわる聖地とされる場所なのである。そこで、永和元年(三七五)に醍醐寺から俊源が来山したストーリーを

述べる寛延縁起(二七五〇)を読み進めてゆこう。

俊源の霊夢

醍醐無量寿院の正嫡俊盛に師事したとされる俊源だが、室町前期の当時としては関東でも周縁の地であった高尾山中を修行の地と定めた。かううじて経典と仏像を雨露

から守る程度の庵を作り、大自然に身を委ね修行に励む日々だったが、かつて十萬枚の護摩を修す。心疲れ仮寝す。夢に人面にして鴟喙、蒼蛇を冠り、笠服を着、背に焰火を出し、腋に両翼を張り、剣を擁し白狐に跨がる。

ある日、十萬枚の護摩修行を終えた俊源は、疲れを覚えてつい寝入ってしまった。その夢枕のうつつの中で脳裏に映じたのは、人の顔をしながらも、鳥のようなくちばしを持ち、頭には青い蛇を冠する。笠服を着るとは、「笠」とは「天竺」、すなわちインドのことだが、仏教発祥の地、あるいは釈迦の出生地ということから仏の着する衣とだろうか。

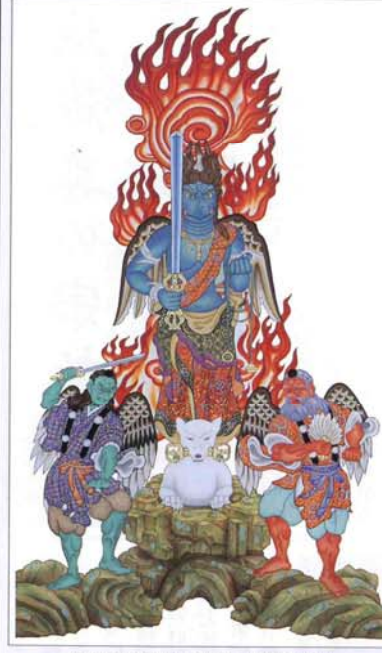
火焔を背負い、腋からは背中の翼が見え、剣を握って白狐にまたがった異形の姿であった。これに謂いて曰く、余は阿遮羅明王たり、叔世辟多し、諸魔まことに繁く、いたずらになす。

異形の者は俊源に対し、自分は阿遮羅明王である。名乗る。アジャラとは梵語で不動明王のこと。笠服や火焔の光背、剣に面影が残るが、異形の姿で現れたその正体は不動明王であった。「叔世」とは末世のこと。「辟」とは「邪」の意味。末世とは仏法の衰退期を示す言い方だが、俊源が高尾の地に来た時期には、皇統が分裂し、日本国中の勢力が南朝方・北朝方に分かれて争乱を繰り返したすぐ後の時代があてられている。当然、寺社や家屋敷が焼け落ち、耕地は荒廃して人々の暮らしも窮していた時代と想定されていただろうが、それを諸魔の跳梁の仕業と解釈するわけである。

余震雷して馮し、まさにこれを降伏す。故にこれを飯繩神という。汝まさに禪祀すべし。「憑」とは俊源に憑依してという意味にも取れるが、「怒」という用例もあるので、諸魔に怒り降伏する、という意味になる。「奇変を現す」とは本来の不動明王ではなく飯繩大権現という神に姿を変じて現れたということだが、仏が姿を変じて示現するとはどういうことか？

権現の「権」という字には「代わり」あるいは「時的な」という意味がある。この権現という考え方は、「本地垂迹説」という仏(本地)が仮の姿で現れる(垂迹)とする教説を基とし、一〇世紀頃から見られるが、蔵王権現、日吉山王権現、白山明理権現など多くの神仏習合の神々が祀られるようになった。

縁起の文面によると、仏法の衰亡期において諸魔が跳梁する異常事態で



御前立御本尊 飯繩大権現御影

あるが故に威力ある神の示現が必要であったということになる。「禪祀」とは潔斎して祀るという意味で、この霊夢によって飯繩大権現を祭祀する使命が俊源に託されたということになる。

飯繩大権現像の祭祀

さて、夢から醒めた俊源であったが、しばらくして自らその像を刻せんと欲す。思つて未だ得ず。

というところであった。飯繩大権現の姿を彫像にしたいと考えたが、それはもちろん容易なことではない。思いあぐねていたところ、

一夕、異人來りて曰く。我、これを能くす。すなわち山西の窮谷巖石の間に於いて盧し、人のこれを窺うを許さず。

「一夕」は一晚と解釈するか、ある夕べとするか。以下に続く神秘的な出来事からすると、周囲が暗くなつてからという解釈が

よいだろうか。「異人」と表現される者がやつて来て述べるところによると、自分にはそれが上手に出来る、と言う。人気のない山中の夕暮れに人が訪ねてくる筈もなく、異人は外国人のことを言っているのか、それとも常態ではない人物ということになるだろうか。暗闇の中では姿形も定かではなからう。そして、山の西方にある峽谷の岩の狭間に、「盧」とは仮住まいの意味なのでそこに籠って仕事を始めたとする。異人は自らが像を刻む姿を決して他人に見せなかつたというから、これもまたそこで行われていることが常人の業ではないことを類推させる表現である。

七日、始めて成す。其の像すなわち夢みし所の如し。威靈赫々。見る者毛起し。正視を得ず。異人また去る所を知らず。

一週間の後、彫像は完成をみた。その姿は見る者の毛を逆立て、とても

正視に堪えられないほどの強い霊力があつたとする。先に述べられた飯繩大権現の姿を思い浮かべていたに違いない。俊源が夢に見た通りだったと言いが、一体、異人はどうやって俊源が夢に見たその姿をそのまま形にできたのか？ 俊源が見たままを語つたとしても、とても常識ではできない仕事ではない。異人はどこへともなく姿をくらましたというが、それもまた神仏の化身のなす業であつたかという余韻が残る。

すなわち祠を建ててここに安んず。土人、俊源の祈り誠う所により、祉を得ざる者なし。異人の盧、その跡なお存す。今、炊谷と曰うなり。

飯繩大権現の彫像を安置して祠を祀り、「土人」とは江戸時代にはその土地の人々を意味したが、山中の奇蹟を聞きつけた近隣の人々が集まつてきたとする。「祉」とは神より授かる幸福という

意味があり、俊源の祈禱により権現の利益を得ない者はなかつたと言う。異人が籠もつた居所の跡は今なお残り、そこを炊谷と呼ぶ、ということである。

しばらく先へ道を進むと三号路に合流する。谷側に下ると、琵琶滝の上流部をトラバースして浄

心門へ至るルートである。前ノ沢方面へ少し降りる途中に「炊谷園地」がある。近年付近の整備がされたようで意外な場所に開豁地としてあり、疲れた足を休める格好の場所となつている。

おことわり 史料の引用については、読みやすく原文に手を加え、適宜読み仮名を付しています。



炊谷園地 中興開山ゆかりの地名が残る